
SIREN : Eternal ring

黒祠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S I R E N : E t e r n a l r i n g

【Nコード】

N 4 2 3 1 H

【作者名】

黒祠

【あらすじ】

神納村——周りを山々に囲まれたこの寒村に、一台のバスが到着した。00:00:00サイレンが鳴り、一つの村が赤い海に消えた。人々は次々と異形の者——屍人へと変わっていき、その数を減らしていく。彼らは、「人」として生き残ることができるのか。それとも、「屍人」として生き残ることを選ぶのか。サイレンは、ただ無情に鳴り響いている……。

織部 真琴 - 06:00:00 (前書き)

ゲーム「SIREN」を元にした小説です。

八月。

狂ったように鳴き続けるセミの合唱を聞きながら、一台のバスが山道を走っていた。

乗客はほとんどいない。というか、僕一人しか乗っていない。

頼杖をつきながら窓の外を眺めているが、見えるのは鬱蒼と茂った木々だけだ。

何かを考えているわけではないが、そう思われても仕方ないような表情をした顔が、うつすらと窓に写り込む。酷い顔してるな、我ながら……。

そんな自分を見なくなかったのか、静かに瞳を閉じ、一人の少女を頭に思い浮かべた。

彼女が死んで、もう一年が経ったのか……。

織部 真琴。僕の名だ。

生まれた時から女のような顔立ちをしており、自分で言うのも変だが男というよりか

「美少女」という表現の方が合ってるような容姿をしている。

そのせいか、家族からも女の子のように育てられ、体格も華奢なものになってしまった。

そしてそれが原因で、長らくイジメを受けてきた。特に女子からのものが酷く、中学校の思い出はあまり人に話せたものではない。そのせいか、僕は女性というものが苦手になっていた。あ、かといって同性に興味があるわけではない。あくまで女性が苦手だったのだ。

高校に入ってから、それは続くと思っていた。
彼女に会うまでは。

恵折^{えおり} 由香^{ゆか}。それが彼女の名前だ。

彼女は父と二人暮らしで、僕も母を幼い頃に亡くしたことを話したら「一緒ね」と共感してくれた。

それから僕は、自分でも驚くくらい彼女と親しくなっていた。周りから見れば、僕ら二人は恋人に見えたかもしれない。それ程のものであった。

あの日、僕がアレを偶然見てしまうまでは…。

「次、神納村、神納村」

運転手の声を聞き、下車の準備を始める。
^{かなむら}神納村。

僕がこれから向かう場所だ。

もともと僕の女性嫌いは常軌を逸していたが、彼女が死んでからは余計酷くなっていた。

高校もまともに通えなくなり、医者から長期療養を薦められた。父もこれに賛成し、僕は親戚の住んでいる神納村へ行くことになったのだ。そして今に至る。

「神納村、神納村」

バスが神納村の停留所に到着した。

大きめのポストンバッグを肩にかけ、バスの運賃を払う。

「ふう……」

深呼吸をすると、都会とは空気が違うのを感じた。

首に下げているペンダントを軽く握り、西の空を見上げる。

日はもう沈み、空は漆黒に染まっていた。

織部 真琴 - 04:40:00 (前書き)

次話以降、サブタイトルに地名が入るかもしれません。

夜の山道は予想以上に暗く、まさに

「一寸先は闇」状態だった。

確か、この辺りに村の入り口があったはずだが……。

「あつ」

暗くてはつきりとは見えないが、そこには『神納村入り口』と書かれた看板が立てられていた。看板の横を見ると、車が一台ギリギリ通れるくらいの道がある。おそらく、ここから神納村に入れるのだろつ。よく見ると、道に沿って川が流れている。さつきから水の音がするなと思っていたが、ここから聞こえていたのか。

……急いだ方がいいかな。

親戚の椎那^{しいな}さんは、父とはよく会っているらしいが僕はからきし会ったことがない。しばらくお世話になる人だし、到着が遅れて迷惑をかけると悪いな……。

「よし……」

僕はバッグを肩にかけなおし、暗い道を走り出した。

道は相変わらず暗いうえに蛇を描いたような形をしていたため、気をつけていないと川に落ちてしまいそいだった。

「ハッ、ハッ……！」

もうかなりの距離を走ったはずだが、一向に村にはたどり着かない。だいぶ遠いのだろうか？

それとも、自分の感覚が麻痺してきただけなのか。

「もう、駄目っ……！」

体力が続かず、僕はとうとう足を止めてしまった。

「ハアツ……ハア……」

膝に手を当て、肩で息をする。額から流れる汗が頬をつたい、地面に落ちた。その時だ。汗の滴が何かに照らされ、一瞬だけ光った。続け様に聞こえたのは、甲高い急ブレーキの音。足元を、背後から黄色い光が照らす。

次の瞬間、自分が川の中に飛び込む音が聞こえた。

僕の意識は、そこで途絶えた。

・
・
・
・
「ん……」

意識がゆっくりと覚めて行くのを感じる。

どうやら自分は、どこかで横になっているようだ。

「気がついた？」

声のする方に視線を向けると、一人の少女が心配そうにこちらを見ている。

綺麗に整えられた黒の長髪に、整った顔立ち。彼女は間違いなく、誰が見ても美少女と言つような容姿をしていた。

ただ一つ、彼女が赤い布地をただ身に巻いただけの姿をしていたことが解せなかった。

「……君は？」

「ああ……私は…神島^{かみしま} 御代^{みしろ}、御代って言うの。貴方は？」

少女はそう言つて、自分にも名乗るように促してきた。

「僕は、織部 真琴……宜しく…」

自己紹介をすまし、僕は辺りを見回した。

周りは木々に囲まれ、遠くからは川の音が聞こえる。空を見上げると、何故か夜空は薄く赤色に染まり、黒と赤が混ざり合った混沌とした色をしていた。

「ここは、一体……」

「ここは神納村よ。川で倒れていた貴方を、私がここまで運んできたの」

彼女の言葉で思い出した。そうだ……僕はあの時、川に飛び込んだんだ。確か、後ろから車が来て、それを避けようとして……。

あの道幅だ。川に飛び込んでなかったら、間違いなく僕は跳ねられていただろう。

「あの……お願いがあるんだけど」

不意に、彼女に話し掛けられた。

「私、貴方を助ける時に濡れちゃって……貴方の服は私が取り替えたんだけど、私の服は乾きそうにないの……出来れば、貴方の余ってる着替えを貸して欲しくて…」

そういえば、服が来た時とは変わっている。バッグは奇跡的に濡れていなかったようだし、彼女がバッグから着替えを出したのだろう。……服を変えている時に目覚めなかったのは、幸運だったのか……。もし彼女に着替えさせられている時に目覚めたら、女性恐怖症の僕はどうなっていたらだろうか……。

しかし、今まで看病してもらって、彼女が濡れたままではあまりに失礼だ。幸い、僕の服はサイズが小さい。彼女が着ても大丈夫だろう。

「じゃあ……どうぞ」

バッグを差し出すと、彼女は

「ありがとう」と一礼し、近くの茂みへ着替えに行った。

「……あ」

ふとあることを思い出し、首元を手で探る。

やはり……ない。

首から下げていたはずの、ペンダントがなくなっている……。川に流されてしまったか……。いや、着替える時に御代が邪魔だから取ったのかもしれない。彼女が帰ってきたら聞いてみよう……。

御代が着替えに行ってから、しばらく経った。そろそろ帰ってくるはずだ。

ふと時計を見ると、ちょうど二本の針が12時を指したところだった。

と、その時。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ……！！

巨大な音が、鳴り響いた。

その音は何かのうなり声にも聞こえたが、これほど大きな鳴き声の動物などいるわけがない。

両手を耳に当てるが、まったく意味がない。頭が割れそうだ……！！

オオオオオオオオオン……

音が鳴り止んだ。

何だったんだ、あの……サイレンみたいな音は…？

「キャアアッ！」

叫び声と共に、茂みから人影が飛び出した。御代だ。

「御代さん！？」

腰をついたままの御代の下に駆け寄ると、御代が茂みの奥を、怯えた様子でじつと見つめていることに気づいた。

「御代……？」

御代の視線を追い、茂みの奥を見つめる。

『いひつ、ひひ……』

「……っ！」

一瞬、頭の中にノイズ混じりの映像が写った気がした。それは誰かの視界のようで、木々の茂みをかき分けている映像だった。

ガサガサ、と茂みが揺れる。
まさか……。

『はあ、はあ………』

瞳を閉じると、またあの映像が流れた。
そして、身を凍らせた。

その映像には、自分が写っていた。
ゆっくりと後退りしている御代と、目を閉じた自分。
誰かが、自分を見ている。

『みいつけたあ………』

視界の主がそう言った瞬間、僕は目を開き、御代の腕を掴んで後ろに飛び退いた。

「うつ………！」

声を上げなかったのは奇跡だろう。

全身を赤い衣装に包み、口元をやつと歪ませた男が立っていた。恐ろしかったのは、男の目だった。

男の目からは、おびただしい量の赤い液体が流れていた。血のようなそれは、男の頬をつたい、赤い衣装をさらに赤く染めている。

「は……」

早く、逃げなきゃ……。

目の前の存在が、何かはわからない。だが、明らかに『人間』ではない……！

「オオオオウツ！」

突然、男が奇妙な叫び声を上げた。思わぬ男の行動で、身体がびくつく。

しかし、そのおかげで恐怖に固まっていた身体が、動かせるようになっていた。

御代の腕を掴んだまま、背を向けていた林道へ駆け抜ける。しかし、

「あつ………！」

僕が急に引つ張ったせいで、御代はバランスを崩し、転んでしまった。

そして、男はその隙を逃さなかった。

男は御代の上に覆い被さり、歓喜の声を漏らしながら御代に組みふせようとする。

「やつ、嫌………！」

「つか、まえた……ひっ！」

まずい、このままじゃあ……あ！

辺りを見渡すと、男が出てきた茂みの近くに、人の頭ほどの大きさの石が落ちていた。

ゴツゴツとしたその石を掴み、男の背後へと近づく。

男は御代に夢中で、後ろにいる自分に気づいていない……。

ゆっくりと、石を振り上げる。

一瞬、降り下ろそうとする腕を理性が止める。

本当は、人間だったらどうする？

「……………っ！」

今は、彼女を助けるんだっ！！

僕は理性の囁きを無視し、男の頭に石を降り下ろした。

グチャ、という不快な音と共に、男の身体が力なく倒れる。

「あ………」

「今のうちに！早くっ！」

僕は御代を立たせ、林道へ逃げるように駆けて行った。

稲畝 文明

- 06:30:00

既久州川（前書き）

二人目の登場人物です。

既に日も沈み、夕闇に包まれた山道。

そんな場所を、稲畝^{いなせ} 文明^{ふみあき}は愛車に乗って走っていた。

「くそ、もうこんな時間が……」

まさか出掛けに車がパンクするなんて……タイヤを替えるのに、かなり時間がかかった。

このままでは、神納村に着くのは八時を過ぎるかもしれない。そう思うと、自然にアクセルを踏む力が強まる。

「……」

数日前のことだ。

自分がライターをしている雑誌

「アトランティス」で、今回新しい企画をすることになった。企画の題材は『日本の神話伝説』。普段からオカルティックな記事を書いている

「アトランティス」としては、そう珍しい企画じゃない。早速私は、日本各地に伝わる神話や伝説を調べ、この神納村を見つけた。

神納村神話。

その内容は、とても興味深かった。

神話によると昔、二人の神がいたそうだ。

一人は、破瀬神^{はぜのかみ}という男の神。

もう一人は、俾瀬神^{へいぜのかみ}という女の神。

二人はお互いをとて愛しており、二人で幸せに暮らしていた。しかしある日を境にそんな二人の幸せも終わりを迎える。俦瀬神が死んでしまうのだ。

俾瀨神の死を悔やんだ破瀨神は、俾瀨神を蘇らせるため冥府を下った。…神が冥府を下る——冥府下りの話は、世界中の神話に登場する。例を言えば、イザナギの冥府下りなどが有名だろう。

さて、冥府へ下りた破瀨神は、そこで何故か仮面を被った俾瀨神に出合った。

破瀨神は再会の喜びも相まって、俾瀨神に素顔を見せて欲しいと願ったのだが、何故か俾瀨神は仮面をとろうとしない。それでも素顔を見たい破瀨神は、無理矢理に俾瀨神の仮面を取ってしまった。

……仮面の下には、血の涙を流し、愛憎入り交じった異様な表情をした俾瀨神の顔があつた。

仮面を取られた俦瀨神は激怒。俦瀨神は破瀨神を殺し、その死体と通じ冥府の住人を産んだという。

とても穏やかな話ではないが、神話の内容としては実に興味深い。私は神納村神話の記事を書くことに決め、その取材のために神納村へ赴くこととなった。

調べたところ、神納村は閉鎖的な体制の村らしく、結局記事を書く私だけでの村への訪問が決まり、付き添いもなく山道をガタガタと数時間。

正直、ここまで長くなるとは思いもよらなかった。

「ん……？」

しばらく狭い道を進んで行くと、車が一台通れるかどうかぐらいの狭い林道が、車のライトに照らされて現れた。

道の脇にぼんやりと浮かび上がっている看板には、『神納村入り口』と書かれている。どうやら、ここから村に入るようだ。

「あれ？」

車のエンジン音の他に、何か違う音が聞こえる。
運転席側の窓を少し開け、助手席に置いていた懐中電灯を手取る。
音のする方へ懐中電灯の光を向けると、木々の合間から川の流れが
見えた。

確か、『既久州川』^{すてくすがわ}だったか？

村の中心にある沼に繋がっているとか……。

とにかく、この道を進めば村に着くということだ。

どのみち、急がなければ……。

数十年に一度行われる、神納村の秘祭。私が神納村神話を書くこと
に決めた最大のきっかけ。

それが、今日、行われるのだ。

アクセルを踏む力が、徐々に強まっていく。

車のスピードは徐々に上がり、緩やかなカーブでも危つく木に当た
りそうになる。

「っ！……いけない、いけない……」

そう思い、アクセルを踏む力を緩めようとした時、ライトの光の中
に人影が浮かび上がった。

「っ！？なっ……！」

慌ててブレーキを踏み、ハンドルを右に切る。

車は川と反対の木々に突っ込んだ。

車体に強い衝撃が走ったかと思うと、次の瞬間、頭に激痛が生じる。

私は、そこで気を失った。

堀田 和美

00:32:29

辺降区(前書き)

三人目の登場人物ですが、かなり腕っぷしが強いです。多分、本作で一番いいパンチしてるかも……。

一体、何がどうなっているの？

商店の物陰に隠れながら、堀田^{ほりだ} 和美^{かずみ}はそう思った。

つい先ほど、日付が変わった頃だ。

村の中央にある沼の方から、激しいサイレンのような音が響いた。そしてその直後、『儀式』を行っていた数人の村人が沼から帰ってきた。変わり果てた姿で。

『儀式』を行っていた村人達は、狂ったように他の村人を襲い始めたのだ。

襲われて死んでしまった村人は、彼らと同じように赤い涙を流し、彼らと同じように他の村人を襲い出した。

私は亡くなった兄、堀田^{ほりだ} 和人^{かずと}の部屋を整理していて、偶然起きていたため、寝込みを襲われることはなかった。

そして今は家を出て、『辺降区^{へふりく}』にある商店の裏手に隠れている。

「でも、一体何なのかしら……」

死んだ人間が蘇るなんて、信じられない……。

考古学者だった兄なら、なにかわかったのだろうか……いえ、今はそれどころじゃない。

壁の影から悟られぬよう静かに顔を出し、辺りを見渡す。

見れる範囲は限られるが、ここから見えるだけで二人の村人が確認できた。

もちろん、目からは一筋の赤い涙が流れている。

……もう、村人のほとんどは『ああなつて』しまったのだろう。先ほどまでは村のあちらこちらから聞こえていた悲鳴も、今は一つも聞こえない。

村がこうなってしまった以上、村から逃げなければならないだろう。幸い、おかしくなった村人は村から出ようとしていない。それを裏付けるように、ここから見える村の出口から出て行こうとする村人はいなかった。

……そう、村の出口はすぐそこだ。
だが、その前を二人の村人が彷徨っている。
まるで、ここから出て行く者を狙っているかのように……。

「どうすれば……」

彼らには、人間ほどではないが知性がある。
洋画に登場するゾンビやアンデットと違い、小さな音にも反応し、人間と仲間の判別も出来るのだ。
しかし、あくまで知性は人間より低いはず。

なにか、注意を引くようなものがあれば……。

「……………あ」

ふと辺りを見渡すと、鉄骨で組み立てられた小さな火の見櫓が視界に入った。

……そうだ、昼の役場放送！

毎日一回、昼に放送される村役場の放送。あの放送は、村に二つある火の見櫓のスピーカーから流れていた！

片方はここからすぐの火の見櫓。もう片方はここから少し離れた『神納村小中合同学校』の近くに立っていて、学生はその放送を昼のチャイムがわりに使っていた。

学校側の火の見櫓から声を流せば、村人はそちらへ向かうはず……。

「よし……」

幸い、火の見櫓の管理小屋はこちら側の火の見櫓の下にある。確か、管理小屋の鍵は役場員の椎那さんが持っていたはずだ。

椎那さんは『椎那商店』という雑貨屋を開いている。

……そう、私が今隠れている場所。私のすぐ真後ろにある建物こそ、『椎那商店』だった。

しゃがんでいた足を立ち上がらせ、『椎那商店』の裏口へ向かう。その時だ。

『まこと、ちゃん……まだかなああ……』

激しい頭痛に目を閉じると、誰かの視界のようなものが頭の中に映り込んだ。

目に見えたのではなく、頭の中に映ったのだ。

……椎那さんの視界だろうか？

というのも、その視界には一度上がったことのある椎那さんの家の中が映っていたのだ。

目を開けると、先ほどの視界がひろがる。
今の一体……人の視界を盗み見る、『幻視』……。

確か、兄の研究資料でそんな単語を見たことがある。

……そんなことより、どうしたものか。

今の椎那さんの様子を見る限り、既に人間ではないだろう。
しかも、残念なことに管理小屋の鍵は椎那さんが首にかけているように、廊下を歩き回りながらも時折立ち止まっては力チャ力チャと鍵をいじっていた。

しかし、他の村人と違い凶器は持っていなかった。

何故かはわからないが、多分『まこと』なる人物を待っているからだろう。

凶器を持っていないなら……なんとかなるかもしれない。

私は着ていたワイシャツの襟を緩め、ジーンズのベルトを少し強く締めた。

椎那さんはもちろん、周りの村人にもバレないように裏口のドアを引く。良かった、開いてる……。

裏玄関へ入ると、椎那さんが廊下を歩く音が聞こえた。

もう一度目を閉じ、意識を巡らせる。

すると、再び椎那さんの視界が視えた。

椎那さんの視界が裏玄関を通り過ぎ、居間の方へ向かう。今だ！

「ハッ……！」

私は短く小さく息を吐き、大股で椎那さんの背後へ歩み寄る。

「……？……まことちゃ……」

振り返った椎那さんの顔には、やはり一筋の赤い涙。

その姿に一瞬ひるんでしまうが、その時には既に私の拳は椎那さんの顔を捉えていた。

正拳突きをもらに食らった椎那さんは、口から咳き込むように血を吐き、仰向けに廊下へと倒れた。

「うつつ、うつ……？」

何が起きたのか分からない椎那さんは、顎を砕かれたというのに普通に起き上がろうとする。

「ウソッ……うつ、ごめんなさい……！」

そう言つて、私は椎那さんの腹部へ拳を降り下ろした。

椎那さんはもう一度血を吐き出すと、今度こそ元の屍体へと戻った。

「ハア、ハア、ハア……」

伊達に空手で黒い帯を締めている訳ではない……。

まさか、幼少の頃から習っていた空手が、こんな風に役に立つとは……。

倒れている椎那さんの首から鍵を取ると、私はもと来た裏口から『椎那商店』を後にした。

さて、あとは管理小屋へ向かうだけ。

管理小屋はすぐ目と鼻の先だ。村人に気づかれないう進めばいい。

管理小屋の中に入ると、私は早速スピーカーのスイッチを入れた。

「あ、そくだ……」

小屋の中にあつたハサミを手に取り、壁に取り付けられた二本の電線の元へ向かう。

「確か、こっちが学校側の火の見櫓だったはず……だから、こっちか」

その電線は、火の見櫓のスピーカーに繋がっている物だった。この上にあるスピーカーにまで声を流しては、意味がない。あくまでも、学校側のスピーカーだけが声を流さなければならぬのだ。

私は小屋の天井へ伸びる電線をハサミで切り、スピーカーの再生スイッチを押した。

『……正午を迎えました。皆さん、昼休みに入ってください』

私がマイクに向かってそう言うと、遠くから同じような声が聞こえた。

バレないように小屋の小窓から外を覗くと、村人達がよろよろと学校の方へ向かっている。成功だ。

「やった……」

小屋を出ると、辺りに村人は一人もいなかった。

早く村を出なければ……。

私は、村の出口である川沿いの林道へ走り出した。
そして、

ドンッ

夢中で走っていたせいか、林道の入り口で誰かとぶつかってしまった。

「……誰？」

ゆっくりと顔を上げた私が見たのは……。

織部 真琴

00:51:08

祈尾洲（前書き）

村の風習が明らかになります。戦闘は少なめです。

木々に覆い隠された林道を、織部 真琴は必死に走り続けていた。

くそつ、喉が痛い……胸が苦しい……！

「ちょっと、待って……！」

激しく息を切りながら、御代が自分の腕を振り払う。

そういえば、ここに来るまでずっと彼女の腕を握っていた。途端に、さっきまでの状況が急に怖くなってきた。……普段なら、失神しかない。

「ハアツ、ハアツ、ハア……」

御代が苦しそうにしているのを見て、自分が彼女にかなり無理をさせてしまったことに気付いた。

「う、ごめん……」

「……少し、休ませて」

自分の謝罪に対し、返ってきたのは休憩の申し出。

来た道を振り返るが、林道には暗闇が続くだけ。追手どころか、風に揺れる木々すら見えなかった。

「……そう、だね……そうしよう」

そう言つと、御代はすぐ木の根本に腰を下ろした。
彼女に続いて、僕もその横に腰を下ろす。

サラサラと静かに流れる川の音が、二人の間を優しく包み込む。
ふと背後の川を見ると、さっき見た時よりもかなり川幅が細くなつて
いることに気付いた。僕らが今いる場所は、さっきいた場所より
下った場所だから……多分、あの川の支流かな？

……一瞬、暗闇の中で川が赤く光った気がした。
きつと気のせいだ、うん……。

「あれ……？」

木々と川を挟んだ向こう側に、何か動く物が見えた。

よく目を凝らして見ると、それは数人で動く村人の姿だった。
何やら挙動がおかしい。もしかあの男と同じように……だとすると、
他の村人も全員……！？

「どうか、したの？」

突然話しかけてきた御代に、つい身体が反応する。

「あつ……いや、あの人達、何やってるのかなって」

「あの人達？」

首を傾げる御代に、川の向こう側を指差す。

村人達は大きな木の前で、相変わらずひたすら何か作業をしていた。

「あれは……めんつけ面礫。その昔、この村を創り出した女神の姿を真似、

その力にあやかるときの儀式」

めんつけ……？

いまいち状況を飲み込めていない僕に、御代が補足する。

「…この村の村人達は年に一度、自分だけの仮面を被ってお祭りです踊りを踊るの。そして踊り終わると、来年のお祭りまで自分の仮面を村の神木に打ち付けておくの」

村人全員が、仮面をつけて踊る……想像しただけでも気味が悪い。しかもその仮面を神木に打ち付けるなんて……まるで呪いをかける儀式じゃないか。

「でも……仮面つて必ず打ち付けないといけないの？」

「面礫をしなければ、仮面の狂気は徐々に持ち主を蝕み、最後は女神に取り憑かれてしまうの……」

「それが、『アレ』の正体？」

僕が村人達を指差すと、御代は首を横に振った。

「……『アレ』からなるの。アレはこの村に流れる神の狂気が、屍体に偽りの生を与えた姿」

「神つて、さっきの女神？」

「女神の夫。愛する妻に殺された、哀れな神の狂気……」

……まだよくわからないが、とりあえず今の村人達は動く屍体らし

い。

倒しても人殺しにはならない。そう思うと、さっきより少し気が楽になった。

「……もう大丈夫。そろそろ行きましょう」

ゆっくりと、静かに御代が立ち上がる。

「あ……でも、どこに……」

「村から出ましょう。でも、そのためには今の状況をどうにかしないと……」

え？

村から出るだけなら、あの男をかわしながらでも逃げる事が出来るはずだ。

今の御代の口振りでは、まるで村から出ることは不可能のように聞こえる。

「……今の村からは出られないわ。来て」

そう言うなり御代は僕の腕を取り、近くに立っていた火の見櫓まで僕を連れてきた。

「登って」

「あ、うん」

火の見櫓の梯子を、ゆっくりと登って行く。
火の見櫓に登り終え、辺りを見渡した。

そして、
目を疑った。

「……え……」

目に写ったのは、村の全景。そしてその先に広がる、赤い海。

まるで孤島のように村は赤い海に浮かび、村を包む赤い海はどこまでも続き、妖しくぼんやりとした光を放っていた。

「なに、これ……」

「私達に、逃げ場はないのよ。私達が助かるには、この怪異をどうにかしないと……」

プアアンツ！

突然、火の見櫓に設置されたスピーカーから音が流れた。

『……正午を迎えました。皆さん、昼休みに入ってください』

マズイ。

川辺を見ると、村人達がこちらに向かって来るのが見えた。

「早く逃げましょう。……このままじゃあ、囲まれてしまう」

御代の言う通りだ。

僕は火の見櫓を降りて、山道へ続く道へと走り出した。

稲畝 文明

01:00:00

既久州川（前書き）

更新遅れてすみません……。

「う……？」

頭に重く響く鈍痛で、稲畝 文明は目を覚ました。

ハンドルに乗せたままだった頭を浮かすと、またあの鈍痛を感じた。額に手をやると、乾きかけた血が指についた。どうやら、かなり強く頭を打ったらしい。

フロントガラスから前を見ると、木にぶつかり、ひしゃげてしまったボンネットが見えた。

ライトは消えている。バッテリーが上がってしまったのだろう。エンジンは当然の如く止まっている。まあ、無理もない……。

あの時……確か私は、人影を避けようとハンドルを切って、そして……。

そこで私の記憶は終わっている。

時計を見ると、時計は既に12時を過ぎており、もう少しで分針も時計に追い付きそうだった。

……とりあえず、車だな。

レッカー車を呼ばうと携帯電話を開いたが、どうも圏外のような仕方がない、村の電話を借りるしかないか……。

今は亡き愛車を降り、私は川沿いに夜道を進むことにした。

携帯用の懐中電灯で辺りを照らす、見えるのは左右を覆う木々だ

け。

進めど進めど、それは変わらなかった。

「……？」

一瞬、頭の中で何かの映像が流れた気がした。
自分の視界に無理矢理割り込まれたような感覚。

『はあつ、はあ……』

「なつ……！？」

まただ……しかも、今度は一瞬じゃない。
激しい頭痛と共に、ノイズの混じった誰かの視界が、はつきりと見えたのだ。

「なんだ今のは……」

もう一度、目を閉じてみる。

意識を集中させると、再び誰かの視界が見えた。

激しくノイズが走っているが、どうやら女性の視界のようだ。
視界の中でその女性は、何かケーブルのような物をハサミで切っている。

更に意識を巡らせると、今度はノイズの少ない映像が見えた。恐ら

く、これも誰かの視界だろう。
息づかいがかなり激しい。
そういえば、最初に見えた映像と雰囲気似ている気がする。

あれ？

今、人影が見えたような……。

『ふひっ』

ザワ、と背筋に悪寒が走る。

そして次の瞬間、視界の主は急にどこかに向かって一目散に走り出した。

一体どこに……しかしその答えは、すぐにわかった。

徐々に見えてきたのは、前部が潰れた車と見覚えのある人影。

あれは、私だ。

視界の主は、目の前から私目掛けて必死になって走ってくる。

私は急に怖くなり、目を開いた。そして、すぐ開いたことを後悔したくなった。

頭からおびただしい出血をした赤装束の男が、自分に向かって走って来ている。

「なっ……！？」

あれだけの出血で、平気なわけがない！
化物だ……。

とつさに私は振り返り、車で来た道を走り出した。
あの男から逃げるため、必死に足を動かす。

永遠に続くかと思われたこの逃走劇は、意外な形で幕を降ろした。

「……なんだ、これは」

目の前に、海が広がっていた。それもただの海ではない。
赤い……海が赤いのだ。
黒い空と対を為すようなその赤い海には、絶えず鈍い光を含んだ波
が立ち続けている。

道の真横を流れていた既久州川は、この赤い海と繋がっていた。

しかし、今はそれどころではない！

振り返ると、既にあの男は私のすぐそばまで来ていた。

くそ……こうなれば、一か八かだ！

私は走ってくる男をギリギリまで引き付け、男の眼前に懐中電灯を
向けた。

「ギイッ！？」

苦しそうに、男が両目を抑えた。よしっ、今のうちに！

私は来た道を全力で走りだした。背後も振り返らず、前だけを見て
ひたすらに。

そうしているうちに、徐々に道が開けてきた。商店のような物も見

える。どうやら村の中に入ったようだ。

ドンッ

「うつ……」

突然飛び出してきた人影に、私の体がぶつかった。

女性だろうか……倒れた相手はかなり小柄で、白いワイシャツに細めのジーンズを履いていた。

「あの、大丈夫ですか？」

私がそう言つと、女性は安心したように息を吐いた。

「良かった……まだ人がいたのね」

ん？

この人の声、どこかで聞いたことがあるな……そうだ、さっき視界を盗み見た時に聞いた声だ！

「あの、すいません……一体この村で何が？」

「……村を出てから話すわ。貴方も命は惜しいでしょう？ さあ、行きましょう」

そう言つて、彼女は私が来た道を行こうとする。それを私の手が彼女の肩を掴み、止めた。

「！……何をするの」

「村からは出られない。それに、そっちには何か異常な奴もいる」

恐らく村の周りは、あの赤い海に囲まれている。あり得ないことだが……。

それにあの男のこともある。彼女一人では危ない。

「どうということ？」

「出口の先には赤い海が広がっていた。現状では村から出ることは出来ない……」

「赤い海………」

「赤い海」という単語に、彼女が反応した。

そういえば、彼女は村人なのだろうか。だとすれば、村の秘密を何か知っていてもおかしくはない。

「兄の資料で見たことがあるわ……『赤い海は、村が、かの地へと還るための門』……だったかしら。じゃあこの村は一体……」

彼女の兄は神話や民話関係に精通しているのだろうか？

こんな時だというのに、私の記者としての性分が反応してしまう。

「君の兄さんは、今どこにいるんだ？是非一度会ってみたいんだが……」

「……兄は死んだわ。学者だったから、家に沢山資料があるのよ。この村の神話を調べてみたいだけ……」

……悪いことを聞いてしまったな。

しかし、彼女の家にある資料にはかなり興味がある。

記事のためだけとは言わないが、この異空間から逃げ出すための情報があるかもしれない。

「すまない……君の家はどこにあるんだ？もしかしたら、今の状況と君の兄さんの資料は何か関係があるかもしれない」

「確かに、奇妙に符合する点はいけど……私の家は辺降区の端にあるから、けっこう遠いわよ？」

辺降区……確か、ここを含めて村の半分をしめる居住区のことだ。端というと、ここから行くとかなり時間が掛かるということか…。

「構わない。それに、二人で行動した方が安全じゃないか？」

彼女の話ぶりから察するに、恐らく村人の殆どはあの男のようになっってしまったのだろう。

そんな連中が彷徨く村の中を、一人で歩くのはあまりにも無謀だ。しかし、二人なら一人よりは安全なはず。

今は、少しでも生き残る確率を上げるべきだ。

「……わかったわ」

どうやら、彼女も決心したようだ。

そつと決まれば、急いで行動を……。

「……後ろっ！」

「えっ……」

そう言った瞬間、彼女の拳が私の顔をかすった。

「うげえ……」

振り向くと、自分のすぐ後ろでさっきの男が顔を潰していた。いや、今潰れたのか。

「…今の内に、さあ！」

「あ、ああ……」

彼女に促されるまま、走り出す。

あの男を見ると、ゆっくりと立ち上がろうとしているところだった。

「……そういえば、お互い自己紹介もしてなかったわね」

走りながら、唐突に彼女がそう切り出した。

「堀田 和美よ、よろしく」

「稲畝、文明だ……」

闇と静寂に包まれた村の中、生き残る確率が少し増えた気がした。

平拉草

筱音

00:40:22

神納村小中合同学校（前書き）

更新遅れぎみでスミマセン……。

何故、こうなってしまったのだろうか？

暗い教室の中、平拉草^{ひらくさ} 篠音^{しの}はじっと身を固めていた。

それは唐突に起きた。

ちょうど日付が変わった頃、村に巨大な轟音が響き渡った。

その時、私はもう学校にいたのだが、あのサイレンのような音が鳴ってから村人の様子がおかしくなったらしい。

それに、おかしくなったのは私も例外ではない。

あのサイレンの後、激しい頭痛と共に『あるもの』が見えるようになった。

それは他人の視界。

この学校一帯の他人の視界を、盗み見ることが出来るようになっていたのだ。

今の村は異常だ。

彼との約束の時間も、既に過ぎている……心配だ。

「平須君……」

平須^{ひらす} 星太^{せいた}。教師である私の教え子であり、かけがえのない大切な人。

一年前、教育実習でこの村を訪れ、私は彼と出会った。年が非常に近いせいもあったのか、私は色んな生徒達から注目された。それは別に嫌じゃなかったし、むしろ教師になりたい自分としては、嬉しいことでもあった。

しかし、私にまったく興味を示さない生徒がいた。それが平須君だった。

何事にも大人しく、興味を示さない。そんな彼がとても気掛かりで、私は積極的に彼に話し掛けた。

そうしていくうちに、彼は私に心を開いてくれた。彼は私の前だけで笑い、その心の内を吐露してくれた。

教育実習の任期が終わった後も、私は彼のことが気掛かりだった。彼にもう一度会いたい……その一心で、私は必死に努力した。幸い、こんな田舎に行きたがる教師は珍しく、簡単に赴任は決まった。

私達は再会することが出来た。けれど……。

「……………」

私達はこの村にいられない。ここにいても、私達に待っているのは破滅だけだ。

そして今日、私達は深夜の学校で待ち合わせをし、村から出る……はずだった。

「どうして、こんなことに……………」

ふと教室の窓から外を覗くと、見慣れた影が校門から走ってくるのが見えた。

間違いない、あれは星太君だ。

しかし、どこか様子がおかしい。まるで何かから逃げてるような……

…まさかっ!?

暗がりでもよく見えなかったが、校舎へと駆け込んだ星太君の後を、数人の村人が追っているようだった。

「大変……………」

星太君が今の村人に襲われでもしたら……！

私は目を閉じ、必死に星太君の意識を追った。

しばらくすると、やっと星太君の視界が見えた。

階段を登ってる……もう二階に来てるの？そのまま廊下を進んで……トイレの個室に入った。

星太君は男子トイレにいる……でも今のままじゃあ、いずれ見つかってしまう……。

なんとかして村人の気を、トイレからそらさなきゃ……。

「……よしっ」

決意を固め、教室の外へ歩を進める。

この校舎は二階建てで、二階は階段を登ってトイレ、家庭科室、教室が4つ廊下に沿って続いている。

4つある教室の内、私がいるのは一番端の教室だ。

村人と言うと、平須君のいるトイレの周りをずっと行き来していた。

私は村人の視界に注意しながら、家庭科室へと向かった。

「確か……あつた！」

調理台の引き出しの中に置かれていた笛吹きケトルを、音を立てないように静かに取り出す。

ケトルに水を入れ、コンロで火にかける。

「あとは……」

家庭科室を後にして、隣の教室に隠れる。

しばらくすると、家庭科室からけたたましい笛の音が聞こえてきた。耳をつんざくような高音が、学校の中に響き渡る。

目を閉じ、村人の意識を探る。

トイレの周りを彷徨っていた村人の視界が見えると、その視界はゆつくりと家庭科室の中へ入って行った。

「よし……」

目を開き、震える足でトイレへと歩きだす。

常に家庭科室へ注意を払いながら、ゆつくり……ゆつくりと歩を進める。

あと少し……トイレの入り口まで、確実に１メートルを切った。

40センチ……30センチ……10センチ……。

トイレのくぼんだ入り口に、足が届いた。

3つ並んだトイレの個室の中で、一つだけドアの閉じている三番目の個室の前まで進む。

「星太君……私よ。ドアを開けて……」

家庭科室にいる村人に聞き取られないよう、小さくか細い声でそう個室のドアに話し掛けた。

ドアがゆつくりと開いていく……。

「先生……」

泣きそうな顔をした星太君が、そこにいた。

「良かった……怪我はない？」

「うん……それより先生、なんだか変だよ……村の皆は死んでるのに動き出すし、僕は変なのが見えるし……」

死んでるのに……？

バカな、そんな映画みたいなのが……。

「僕らがにげようとしたからかな……」

「そんなこと……」

「だって、僕まだお面を張り付けに行っていないんだ……もしかしたら、そのせいで……」

確か、村の神木に自分の仮面を張り付けに行かなきゃ……とかいう風習だったけ？

私も村に住むようになってから、すぐ作らされたけど……そんなことで村がこうなるとは、到底思えない。

「大丈夫よ。私だって……ほら、まだ張り付けに行っていないし。貴方のせいなんかじゃないわ……」

そう言いながら、肩にかけていたカバンから自分の仮面を取り出すと、それを見た星太君の表情が少し落ち着いたように見えた。

「じゃあ、早く村を出しましょう。外に私の車を止めてあるから……」

と、その時。

『……………ました。皆さん、昼休みに入って下さい……………』

学校の近くにある火の見櫓から、何か放送が流れた。

「今のつて、昼の放送？でもあの声って確か……………あつ！」

急に何か思い出したように声を上げたかと思うと、星太君は静かに目を閉じた。

「星太君……………？」

心配して声をかけると、星太君は青ざめた顔で目を開いた。

「先生……………大変だよ……………」

「どうしたの……………？」

星太君が、ゆっくりと自分に目を合わせる。

「村人が……………この学校に集まって来てる」

見学旅行の後、新型インフルエンザにかかってしまい、更新が一ヶ月近くかかってしまいました……。

以後はこんなに更新が遅れないと思います…。

村人が——ここに？

そんな……一人どうにかするだけでも、あんなに大変だったのに…。

「…どうにかして、校舎から逃げないと」

「でも先生、どうにかってどうやって……」

そう、問題はそこだ。

村人達がいつも通り来るとしたら、恐らく正面玄関前のグラウンドに集まるだろう。

普段、学校のグラウンドは村人達の交流場所として、昼と放課後の二回に一般開放されている。信じられないことだが、恐らく彼らは今の放送を聞いて、ここに向かってきているのだ。

「正面玄関からは駄目……教員用の裏玄関なら、逃げれるかも…！」

一階の職員室横にある裏玄関。あそこからなら、村人とあまり出会うずに行けるかもしれない。

「でも、裏玄関まではどうやって……？」

平須君の言うことももっともだ。けれど、こればかりはどうしようもない。

「今なら、校舎の中にそれほど村人はいないわ。私が平須君を裏玄関まで守るから、平須君は私の車を使って村人を誘き寄せて欲しい

の」

そう言つて、車の鍵を平須君の手に握らせる。

「で、でも……先生は？」

「職員室に立てこもればいいわ。内側から鍵を掛ければ、外からは入れない。あとは、窓から出て合流すればいい」

平須君の不安気な顔が、少しずつ明るくなっていく。

「そっか……」

「ええ。私の命は、平須君しだいよ」

「うん……わかった」

鍵を握る手に力が入ったのが、目に見えてわかった。

「……じゃあ、行きましょう」

「うん……！」

トイレの狭い廊下に立て掛けてあつた回転箒を手に取り、両手で構える。

「走るわよ……！」

平須君の返事を待たずに、一気に走り出す。
トイレを出ると、すぐにさっきの村人と鉢合わせになった。

「やあぁっ!!」

槍のように突き出した回転箒が、村人の顔面を衝撃と共に後方へと飛ばした。

倒れた村人を尻目に、そのまま階段を下る。

今の騒ぎを聞き付けたのか、階段には新しい村人が待ち伏せていた。無論、両目から一筋の血涙。

「退いてっ!!」

箒のブラシで村人の首を捉え、そのまま側面の壁へ叩き付ける。

村人はまだ生きてるようだったが、今の一撃で箒のブラシが壊れてしまった。

今は平須君を裏玄関まで連れて行くことだけを考えて……!

「平須君、大丈夫!？」

「うっ、うん!」

良かった、ちゃんとついてきてる……。

階段を降り、廊下へと出た。

一番向こうの曲がり角まで、人影は見えない。

長い廊下を必死に走り続ける。

胸が痛い……息が苦しい……!

箒を持つ手が痛い……無理矢理に振り回したからか……。

ふと後ろを振り返ってみる。

平須君の必死な顔が見えた。不思議……それが決死な表情でも、彼の顔を見ることで、また新たな噴気が湧いてくる。

思えば、私はずっと彼のために生きてきた。
これまでも、これからも。

彼と再び逢うために教員を目指し、今は彼とずっと一緒にいるために走っている。

心酔と言ってもいいこの気持ち、今の私を形造っているんだ……。

彼の死が私の死なら、彼を守るとは私を守ることでもある。

ならば、これほど正統性のある行為はないはずだ。

なのに、何故この村は私達を否定するの？

この気持ちを、何故誰も理解してくれないの？

何故、何故……。

「何故……」

「先生っ！」

平須君の声で我に帰り、視線を上げる。

視線の先には、拳銃を構えた村人が立っていた。

村人の邪悪な笑みが、頬を伝う紅い筋を歪ませる。

だ
め

わたしが よけたら

ひらすくんに

ガァンっ！

乾いた音が、廊下に響き渡った。

腹部に、何か暖かい物を感じる。

次第にその温もりは激痛を孕み、地獄の業火を思わせる灼熱へと姿を変えた。

「——ッ！！」

言い様のない痛みが、足元を狂わせる。
だが、ここで倒れるわけにはいかない……っ！

今やただの木棒へと姿を変えた箒を、村人の腕へ叩き付ける。
落とした銃を広い上げ、村人の横を走り抜ける。

廊下を曲がると、すぐに裏玄関が見えた。

「平須くん、はや……行ってっ！」

「でも、先生は！？その傷じゃあ……」

「いいからっ!!」

「で、でも……」

躊躇する彼の肩を掴み、裏玄関へと突き飛ばす。

「……いけええっ!! 星太っ!!」

「ひえっ……!」

ああ……彼を泣かせてしまった……。

きっと今の私、怖い顔してるんだろっな……。

「私は、ちゃんと行くから……職員室の窓から、ね……?」

頑張って優しい顔をしたつもりだが、少しは彼を安心させただろうか……。

「私の……のちは、あなたに……ってるのよ……!」

駄目だ、声にならない……。

睡魔が、身体に重くのし掛かってくる……!!

「これ、何かあったら……」

彼に、さっき拾った拳銃を差し出す。

ゆっくりとそれを手に取ると、彼の表情がさらに曇った。

「お願いだよ……先生も一所に……!」

「それは出来ない……一所に行ったら、途中で必ず捕まるわ……だから……」

もう、言葉が出なかった。

肉体的な限界だけでなく、もうこれ以上自分の言葉で彼を苦しめたくなかったからだ。

「うう……ぜったい、だよ？」

「ええ、ぜったい……」

そう言って、彼を裏玄関の向こうへ押しやった。ボタン、と扉を閉じ、内鍵を掛ける。

振り返ると、数人の村人が自分に近付いていた。

「ハア……ハア……」

職員室のドアを引いてみるが、案の定鍵が掛かっている。それはそうよね……今何時だと思ってるのよ……。

諦めて、自分に迫る村人達に向き直る。

平須君、大丈夫かな……クラクションが鳴らないって気付いたら、彼は……。

「はは……せめて、あと一回くらい……貴方と一緒に……」

木棒を握り直し、裏玄関の扉に背を預ける。

.....。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4231h/>

SIREN : Eternal ring

2010年10月28日05時32分発行